

別れたる妻に送る手紙

—— 映画文学人生論

近松秋江 (1876-1944)

『別れたる妻に送る手紙』(1910) 「早稲田文学」

『疑惑』(1920) 「新小説」

『黒髪』(1922) 「改造」

『子の愛の為に』(1924) 「中央公論」

お前——別れて了ったから、もう私がお前
と呼び掛ける権利はない。けれど・・・、

近松秋江の『別れたる妻に送る手紙』は、まず
題名で「なんだ、これは？」と考えさせられる。
考えているうちに読者の想像がひろがってくる。

そもそも別れた妻に手紙を出しても今さらどう
にもなるものではない。気持はわかるが、未練を
捨て、新しい出会をもとめたほうがよい。世の中
には女はいくらでもいる。

何のために、こんなムダな手紙を書くのか。

お前——別れて了ったから、もう私がお前を
呼び掛ける権利は無い。そのみならず。風の
音信(たより)に聞けば、お前はもう疾に嫁い
てゐるらしくもある。もしさうだとすれば、お
前はもう取り返しのかかぬ人の妻だ。その人に
こんな手紙を上げるのは、道理から言っても私
が間違つてゐる。けれど、私は、まだお前と呼
ばずにはゐられない。どうぞ此の手紙だけでは
お前と呼ばしてくれ。また斯様な手紙を送つた
と知れたなら大変だ。私はもう何うでも可いが
お前が さぞ迷惑するであろうから申すまでも
ないが、読んで了つたら、直ぐ焼くなり、何う
なりしてくれ。

どうやら相手の住所もわからないらしい。それ
でも手紙を書くのは書かずにはいられないという。



別れたる妻に送る手紙

母や兄にも打明けられないことを話したい。

その話というのが、なんのことはない、もっぱら妻と別れた後で出合った女にまたしても逃げられたという話だから笑ってしまう。そんな話を聞いて、同情してくれる菩薩のような女が世の中にいるとは思えないが、主人公は別れた妻を菩薩のような存在に美化してしまっているのだ。

ところが、続篇の『疑惑』では、主人公は一転して、別れた妻を怨み、「私がお前を殺してゐる光景が様々に想像せられた」と殺意さえ抱くようになった。そのきっかけは、去年の夏、妻が日光へ行ったことを聞いて、宿屋の宿帳を一軒一軒探しまわり、妻の名前を見つけたことだ。

何もわざわざ日光まで行って、古い宿帳を探しまわらなくてもよさそうなものだと思うが、それが愛欲の執念というものだろうか。

妻は男と一緒にだった。男は自宅に下宿させていた学生だが、いつのまにか妻とできていたのだ。主人公は悔しさと妬ましさに身が燃えるような心持がしながら、二年越しの鬱結（うつけつ）が解けたような気がして嬉し涙を流した。

何と愚かな男だろうとは思うが、小説の首脳は人情なり。人情とは人間の情欲にて百人煩惱是なりを模写するのが『小説神髓』なら、『別れた妻に送る手紙』は小説の名作にちがいない。

紅に青葉のうつる舞妓かな

秋江